**２０１４年公開シンポジウム**

**「海遍路・東北-海から自然と文化を考える」**

**開催日時：平成26年6月8日（日）13時30分～17時**

**開催場所：京都大学医学部芝蘭会館 稲盛ホール**

**主催：一般社団法人 全国日本学士会**

**企画の趣旨**

東日本大震災から早や三年の時が流れ、急速な風化が懸念される中、あの大震災が私達に訴えたものを、折に触れ思い出すことが求められます。それは、日本らしさの根底にある自然への思いやり、自然への畏敬の念を取り戻すことにほかなりません。そして、震災の深刻さは、何よりもふるさとを強制的に奪われた多くの皆さんの苦難に、象徴的に現れているように思われます。

大震災が発生した2011年の秋に、高知からシ―カヤックで四国沿岸を巡り、海から人の暮らしや自然の現実を見聞して、幸せの原点やこの国の未来を見つめ直す取り組みが、高知大学名誉教授（現）の山岡耕作さんを中心に始まりました。2013年秋に四国一周の「海遍路」を終え、2014年には、今後の全国展開の皮切りとして、震災の海を巡り、復興の現実とその先を見つめなす「海遍路・東北」が実施されることになりました。

リアスの海として特徴づけられる東北北部の太平洋沿岸域では、森と海が直接つながり、海と共に生きる人々はそのつながりの大切さを受け継ぎ、今では日本の知恵や文化とも言える“森は海の恋人”として世界が注目し始めています。それは、この国の基本構造を山（森）が川や地下水系で海とつながる“垂直的”に捉えたものであり、一方、海遍路は“海抜ゼロメートル”から、津々浦々に多様な文化を育む沿岸域を“水平的”に見つめ直すものと言えます。

この垂直と水平の交差点である水際は、私たち人間の祖先が海から陸に上陸した通り道、すなわち私達の究極の“ふるさと”へ続く道なのです。陸に住む私たちはどうしても、目先の暮らしの利便性や経済成長に目を奪われ、陸の都合で海をないがしろにし続けてきたのではないでしょうか。大震災は私達に海の深く大きな存在を改めて知らしめることになりました。海からこの国の自然と文化を見つめ直すことは、大震災からの復興にとって、さらには続く世代に何を残せるかを考える上でも、とても大事なことと思われます。

一般社団法人全国日本学士会では、昨年に続き東日本大震災からの復興を見つめ直すシンポジュウムを、「海遍路・東北－海から自然と文化を考える」をテーマに開催することになりました。基調講演をお引き受けいただきました、日本が誇る海洋冒険家、八幡　暁さんをはじめ、多士済々なパネリストの皆さんが、東北の海辺を巡った体験を踏まえて、興味深いお話をしていただけることと思います。

多くの皆様のご参加を切に願っております。

平成２６年６月６日

**２０１４年公開シンポジウム「海遍路・東北-海から自然と文化を考える」実行委員会**

委員長　田中　克：京都大学名誉教授、（公財）国際高等研究所チーフリサーチフェロー

事務局　岡田和男：社団法人全国日本学士会専務理事・事務局長

**２０１４年公開シンポジウム**

**「海遍路・東北-海から自然と文化を考える」**

**プログラム**

【司会進行　京都大学名誉教授　田　中　　　克】

**Ⅰ　基調講演**　１３時３０分～１４時４０分（質疑応答１０分含む）

「環境×暮らし＝未来」

海洋冒険家・シーカヤックガイド　　　　　　　　　**八　幡　　　暁**

**Ⅱ　パネル討論**　１４時５０分～１６時１０分

**【話題提供】**

「シーカヤックは人の心を繋ぐ」

高知大学名誉教授・NPO法人海遍路理事長　　　　 **山　岡　耕　作**

「日本文化に宿る、自然への『ありがとう』」

（株）聖護院八ッ橋総本店専務　　　　　　　　　　**鈴　鹿　可奈子**

「科学する心に映る海の色」

科学ジャーナリスト　　　　　　　　　　　　　　　**瀧　澤　美奈子**

「里海・Satoumiからみた海の利用と保全」

広島大学名誉教授・瀬戸内海研究会議顧問　　　　　**松　田　　　治**

**Ⅲ　総合討論**　１６時２０分～１７時００分

**懇 親 会**：１７時３０分～１９時３０分　於：京都大学カンフォーラ

　　　　シンポジウム終了後、講演者を交えた懇親会を催します。会費は1,000円です。

**講演者プロフィール・講演要旨**

**八　幡　　　暁　氏**

**海洋冒険家・シーカヤックガイド**

**【プロフィール】**

1974年東京都生れ。専修大学卒

大学時代より海に目覚め、野球、アメフトから転向。

素もぐり漁を八丈島ではじめ、大学卒業後は各地の漁師の仕事を見ながら、国内外をまわる。

シーカヤックという新しい足を得て、更なる海の可能性広げ、『海とともに暮らす人々は、どのように生きているのか』をテーマに、オーストラリアから日本にかける多島海域を舞台にした「グレートシー マンプロジェクト」を2002年にスタート。

世界初となる航海記録を複数持つ。

2005年から、既存の枠を越える価値を生み出す体験型のツアー会社「手漕屋素潜店ちゅらねしあ」の代表としてもチャレンジを続けてい る。

2010年より、日本の海の現場へ、海から人力移動しながら訪れ、現場の声を聞く活動「海遍路」を開始。

2014年には、首都圏にも拠点を置き、都会暮らしの人々を対象に、人の野生のスイッチを発動させる仕組み と、人材育成の取り組みを開始させる。

**【基調講演「環境×暮らし＝未来」要旨】**

環境を理解し、そこで暮らす、この基本こそが、未来を作ります。

20年間、世界に広がる海の民を手漕ぎの舟で訪ね歩き、

そして東北の海に生きる者たちを通して、冒険家が感じた人が生きること。

**山　岡　耕　作　氏**

**高知大学名誉教授　ＮＰＯ法人海遍路理事長**

**【プロフィール】**

1949年京都市生れ。鹿児島大学水産学部卒業。京都大学大学院農学研究科博士課程中退。

京都大学農学博士。

1987年高知大学農学部講師、助教授、海洋生物教育研究センター教授、同センター長を経て、2004年高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科教授、2013年高知大学退職。

専門は魚類生態学。学位論文として、アフリカのタンガニーカ湖産カワスズメ科魚類の適応放散を食物の獲得行動の面から分析する。その他、マダイやチダイの稚魚期における縄張り形成などを潜水調査により明らかにする。

黒潮圏海洋科学研究科に移動後は文理融合型の「黒潮圏科学」に軸足を移し、2010年より黒潮源流域シーカヤック調査、2011年より四国一周海遍路を始める。NPO法人海遍路理事長。

主な著書にはCichlid Fishes:Behaviour, ecology and evolution. 1991(共著), Fish Communities in Lake Tanganyika. 1997 (共著), 魚の事典 1989(共著), タンガニーカ湖の魚たち1993(共著)など。

**【話題提供「シーカヤックは人の心を繋ぐ」要旨】**

海遍路のツールに、なぜシーカヤックを使うのか。

 私とシーカヤックの出会いは全くの偶然でした。たまたま出張で訪れた石垣島のビジネスホテルで読んだ地方紙のベタ記事で、石垣島在住の海洋冒険家八幡聡さんのことを知ったためです。当時私は、黒潮源流域のルソン島東岸域の漁業調査の方法を決めかねていました。対象地域は島も多く、車で行けない場所も含まれ、ガソリンの自由な調達も困難な地域だったからです。そんな時、八幡さんの記事に出会い、「これだ」と直感しました。すぐに八幡さんと連絡を取り、黒潮源流域調査について話し、彼の協力を得ることができました。

 シーカヤックで行くフィリピン・ルソン島黒潮源流域、約１０００キロの行程中に２７漁村を訪問し、約２５０名の漁師から話を聞きました。６０歳からシーカヤックに挑戦した私を含む調査隊は、訪れた全ての集落で歓迎されました。

 八幡さんからは国内外を問わずシーカヤックで漁村を訪問すると、歓迎されるということは聞いていましたが、実感することとなりました。訪れる漁村の人々は、海の恵みとリスクを熟知した体験者です。手漕ぎのシーカヤックでやってきた私達の行程を瞬時に理解し、壁が払われるのだと思います。

 国内では四国一周味遍路を昨年の秋に完了し、今回海遍路東北を終えました。シーカヤックで行く海遍路は、海に生きる人々との出会いと、本物の自然を実感することを通して、新たな価値観の創出を探りながら未来へ繋いで行きます。

**鈴　鹿　可奈子　氏**

**（株）聖護院八ッ橋総本店専務取締役**

**【プロフィール】**

京都大学経済学部経済学科卒業。信用調査会社勤務を経て、2006 年聖護院八ッ橋総本店入社「守るべきことを守ること、続けていくことが大事」という父・鈴鹿且久社長のもと、長い歴史と伝統の味を守り受けつぎながらも、新しい商品づくりに日々努めている。

2011 年には新しい形で八ッ橋を提供する新ブランド「nikiniki（ニキニキ）」を立ち上げた。現在、専務取締役として活躍中。

**【話題提供「日本文化に宿る、自然への『ありがとう』」要旨】**

京都市内に住んでいると、あまり「海」というものを意識しません。春には桜を愛で秋には紅葉を楽しみ、四季を大切に、ということは日々考えていながらも、私たちに多大なる恩恵を与え、ときに脅威を与える「海」という大きな存在を知らないということに気付きました。海がどれだけ私たちを包み込む威力を持っているのか。また、私たちの暮らしがどれだけ海に支えられているか。今回の海遍路を通じて、シーカヤックという海をそのまま体に感じる乗り物に乗り、私たちの代わりに海に接し恩恵を届けてくださる方々とお話をしていくことで、学んでいければと思います。」

**瀧　澤　美奈子　氏**

 **科学ジャーナリスト**

**【プロフィール】**

お茶の水女子大学大学院理学研究科物理学専攻修了、修士。

慶應義塾大学大学院理工学研究科非常勤講師。

難しい科学をやさしく説き明かすと共に、科学と社会の間に横たわる問題をよりよく解決するために少しでも役割を果たしたいと思い、科学ジャーナリストとしての活動を行う。2005年4月に有人潜水調査船「しんかい6500」に乗船し、相模湾海底約1300メートルの深海を体験。日テレNEWS24特別解説委員としてテレビ出演も経験。

現在、時事通信社で『生きている地球のなかま　多様性がささえる世界』を連載執筆中。著作に『地球温暖化後の社会』（文春新書）、『深海の科学』（べレ出版）、『深海の不思議』（日本実業出版社）、『アストロバイオロジーとは何か』（ソフトバンククリエイティブ）、『日本の深海』（講談社）など。　文部科学省科学技術学術審議会臨時委員。

**【話題提供「科学する心に映る海の色」要旨】**

あの忌まわしい東日本大震災から３年後の春、私は宮城県仙台市から岩手県田老町までの沿岸約３００キロを車で巡った。

　あれから、被災地はどうなっているのか。首都圏に暮らしていると、日々上書きされる新しい情報に飲まれ、東日本大震災を過去の出来事のように捉えてしまいがちになる。しかし、今もなお仮住まいを余儀なくされ、困難な状況下にある被災者の存在は、通奏低音の重苦しい響きのようにつねに私の心にあった。いつのまにか意識下に潜り込んでいるそれを意識の上に引き出し、ここで３年後の現実として記憶に刻み、将来を展望するための一助となることができないか。そんな漠然とした思いで現地を訪れた。

　折しも桜前線が現地を北上中で、リアス式のカーブと起伏の多い海岸沿いの道は、かりにレジャーならばさぞ楽しいドライブだろうと思わせるものだった。左カーブを切りながらジェットコースターで坂を下るように高度を下げていくと、今度は右カーブとなり、曲がりきると右手にとつぜん海が現れる。それがリアス式海岸北上するドライブのパターンであることに、私はすぐに気がついた。

　浦々で車を止めて、小さな漁港を見渡した。

　静かに寄せる波の音と鶯のさえずり。山桜が山腹を淡いピンクに染めている。春風が頬をやさしくなでて、目を閉じればこれ以上美しい日本の原風景は想像できないだろうと思わせた。しかし、現実には違った。入り江の最前線には無惨になぎ倒された防潮堤が、時が止まったように横たわっている。山の中腹に小さな赤い鳥居と社が残るほかには、平地に建物はひとつも見あたらず、家々の礎石がわずかに残るだけだ。人影はまったくない。３年目の春、そこには悲しみが満ち満ちていた。

　この３年の間、被災地では県や国、あるいは有識者の協力も得ながら復興計画を策定し、復興事業が始まった。町づくりは津波から人々の生命財産を守るものとして基本的に二重防護の考えが取り入れられた。まず沿岸には「１００年に１度」の津波(L1)を防ぐ防潮堤を国の費用で築き、その内側にかさ上げをした道路や線路で第２の防御となる堤防を築くというものである。土地利用のしかたは実情に応じて地域の決定に委ねられるが、工場や農地は防潮堤と道路（線路）の間、家や商業地は高台移転した先に再建することが望ましいとされた。L1防潮堤の高さを決めるために、津波のリスク評価のシミュレーションが行われ、それに基づいて住民説明会を開き、決定がなされていったと聞いている。

　通常であれは、大規模な公共事業は、まず計画の策定段階で多くの時間をかけて地元住民の合意をとりつけることが大前提となっている。たとえば、河口域の洪水を防ぐために河川に新たな支流を設けるといった公共工事では、新たな河川によって一方的に利益を得る地域と一方的に損害（慣れ親しんだ土地を離れなければならない等）を受ける地域が出るという、ある種の対立構造が生じる。そのため、場合によっては住民説明に10年以上も手続きと時間をかけ、そのなかで、双方の住民が流域全体としての視点を持つに至り、流域全体として合理的な判断に賛成できるようになる。

　ところが、今回のような地震津波被害からの復興には、人々が住むところも仕事も無くしている状況での公共事業であり、人口流出や高齢化にいち早く対処しなければならないという、時間のファクターが絡んでくる。

　防潮堤の建設に関して、海とのつながりが比較的希薄な河川上流側の住民意識と、漁業の利便性や自然環境保護意識の高い河口域での住民意識が必ずしも完全一致せず、事業の決定に時間を要したことがニュース等で話題になった。本来、多様な視点や意見が存在すること事体が自然であり、自由でかっ達な話し合いのなかで、将来の町づくりを住民の手で進める。これが大原則である。しかし、上述のように時間の問題がある。平時ならば１０年以上もかけて行うであろう作業を、わずか３年で行わざるを得ないなかで軋みも生じた事情が推測できるだけに、外から傍観する者としては、最終的に場所場所で、地元住民が下した結論を、敬意を持って支持したいと思う。

　国道４５号線にはダンプカーが行き交い、土煙をあげていた。かさ上げ用の大量の用土を調達するため、そして高台移転先の土地の確保のため、山を切り崩している様子が各地で見られた。復興の土煙として心強く感じるとともに、この、一見、前世紀的ともいえる大土木事業の状況を目の当たりにし、なんともやるせない気持ちもこみ上げて来た。

　それは、家を流され、仮住まいを余儀なくされている被災者の皆さんに、一刻も早く安心して暮らせる終の住処を提供して欲しいと願う気持ちと、将来過疎化が進む中で、いったいこうして破壊された場所は数十年後にどうなるのだろう、後世の人々はどう思うのだろうという相反する２つの思いだった。打ち捨てられた漁村の悲惨な状況を目の当たりにするにつけ、両者の思いは、そう簡単に私のなかで決着しそうになかった。

　ある漁村でのこと。ここも湾奥部まで完全に津波に流されて、建物は何も残っていなかったが、一軒のお宅の跡地に、鯉のぼりが風をうけて悠然と空を泳いでいた。どんなに破壊されてもここが故郷なのだ―。鯉のぼりはそう言っているような気がした。

　現在は多額の復興事業予算がつぎ込まれ、復興特需ともいえる状況が生まれていると聞く。しかし、本質的にはこの地から持続的に価値を創出するしかけがぜひとも必要だ。今回被災地を巡り、その思いを一層強くした。

**松　田　　　治　氏**

**広島大学名誉教授・NPO法人瀬戸内海研究会議顧問**

**【プロフィール】**

1944年生まれ。専門分野は物質循環論、沿岸環境管理、自然再生など。

1968年　東京大学農学部水産学科卒業。1971年より広島大学で瀬戸内海などの研究と教育に従事、フィールドワークは南極、北極から熱帯海域まで多数。2003年より広島大学名誉教授。

著書に「瀬戸内海を里海に」（編著、恒星社厚生閣）、「森里海連環学」（共著、京大学術出版会）など。

現在、NPO法人瀬戸内海研究会議顧問、海洋政策研究財団特別研究員その他。

農学博士（東京大学）。

**【話題提供「里海・Satoumiからみた海の利用と保全」要旨】**

**はじめに**

東日本大震災の被災地の海、特に入り組んだ三陸リアスの海では湾奥に河川が流入し、その上流はすぐに森や山に連なっている。森・川・海が直接的につながっていて、河口域や河岸の平地に人が住む状況は、田中克教授が提唱する森里海連環学の優れた舞台でもある。このことは里山と里海の関係性が強いことも示している。人が海と密接に関わりながら豊かな海づくりを目指す里海の考え方は、近年、次第に市民権を得て様々な行政施策に取り入れられているのみならず、*Satoumi*として国際的にも強い関心が寄せられている。

　しかし、日本で里海に関する論議や里海づくりの実践が盛んなのは、主として瀬戸内海など、かつて公害、富栄養化、赤潮などの被害が顕著であった地域である。東北の海で里海論がそれほど盛んでないのは、人為的な環境破壊や天然資源の劣化がそれほど深刻でなかったからということもできる。すなわち、自然の復元力だけに頼ることができなくなった瀬戸内海などで、人手を掛けざるを得ない里海づくりが進んだのに対して、東北の海では相対的に豊かな海の時代が長く続いてきたと理解できる。

このような豊かな海が、3.11では正に壊滅的な打撃を受けたわけである。その復興に当たって、環境破壊が進んだ地域で発展してきた里海の考え方や里海づくりの実践活動が、多少なりとも役に立つのではないかというのが本論の趣旨である。そこで、ここでは、まず里海の基本的な考え方と*Satoumi*として国際的に評価されている理由を紹介し、里海の視点から東北の海の復興を考えてみたい。

**里海と里海づくり**

里海づくりは概念的には「物質循環」、「生態系」、「ふれあい」という3つの保全・再生要素と、活動を実践するための「場」と「主体」という2つの活動要素によって構成されている。これらの要素の組み合わせによって、すなわち「どこで」・「だれが」・「どのような視点で」行う活動かによって里海づくりは様々に特徴づけられ、里海づくりの分類・類型化もなされている。

地域の人々が身近に豊かな海を取り戻そうとする里海づくりの実践活動が各地で盛んになっている理由はいろいろあるが、直接的なきっかけとしては、閣議決定された21世紀環境立国戦略（2007）に「豊穣の里海の創生」が盛り込まれ、これ受けて環境省が里海創生支援事業（平成20－22年度）を進めたことが大きい。この支援事業では「里海づくりの手引書」（2011）もとりまとめられた。

近年では，里海は一般社会の中でも市民権を得つつあり、新聞紙上やTV番組などでもしばしば取り上げられている。例えば、全国紙の社説で「里海創生」が「海を身近にするチャンスに」などと紹介され、あるいはNHKスペシャルで「里海・*Satoumi* 瀬戸内海」が全国放映されている。

***Satoumi***

最近、里海は*Satoumi*と表記されて国際的にも強い関心がもたれており、*Satoumi*に関する国際会議も頻繁に行われるようになった。里海が*Satoumi*として国際的に評価されている理由は何であろうか？　より大局的な見方としては、欧米で歴史的に主流であった自然保護と自然の利用開発を空間的に分ける考え方に対して、里海が保全と利用を同一空間内でも調和させようとする新たなコンセプトを提示していることがある。大自然を囲い込んだアメリカの国立公園と「人の暮らす」瀬戸内海国立公園の違いからもヒントが得られる。海洋保護区（MPA: Marine Protected Area）の在り方などに関しても、里海の提唱する海の利用と保全の調和が国際的にも重要な課題となってきたのである。

さらに重要な点は、近年の沿岸域管理に関する国際的な新たな潮流と里海の考え方の親和性にある。つまり、国際的にはIntegrated Coastal Management（ICM:統合的沿岸域管理＝沿岸域の総合的管理）、Ecosystem Based Management（EBM:生態系管理）やCommunity Based Management（CBM:地域主導型管理）が、最近の重要な流れである。里海はこれらのいずれとも親和性が強い。里海はまた、国内における「水質管理中心主義から生態系管理へ」の方向転換や「法律中心から地域主導型合意形成へ」の変化にも概ね対応しており、また流域圏を通して里山と里海をつなぎ森里海を一体的に捉える考え方は「海域の単独管理から陸域を含む沿岸域の総合的管理へ」の変化にもよく合致している。

**里海の視点から東北の海の復興を考える**

里海では人と海の関係性を重視しており、これを再構築することも目標の一つである。この観点からすると、今、東北の海岸線で張り巡らされようとしている巨大防潮堤は、正に人と海の関係性を断ち切る構造物のようにみえる。自然災害の比較的少ない瀬戸内海などでは、里海は前述のように、環境や資源に関する利用と保全の両立に主眼をおいてきた。東北の里海論では、これらの趣旨にさらに防災の重要性とともに人と海の関係性をバランスさせることが必要である。東北の海の復興には、自然の復元力任せではすまない部分が少なくないからで、つまり、東北の海では里海論の新たな展開が期待できる。各地で蓄積されてきた里海づくりの実践手法と合わせて、東北型に進化した新たな里海の考え方が、東北の海の復興に少しでも役に立てば幸いである。

**「司会者の紹介」**

**【田中　克氏：京都大学名誉教授・（公財）国際高等研究所チーフリサーチフェロー】**

1943年滋賀県大津市生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。水産庁西

海区水産研究所研究員、京都大学農学部助教授経て、同大学院農学研究科教授。2003年京都大学フィールド科学教育研究センター長。2007年マレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所客員教授。2010年より（財）国際高等研究所チーフリサーチフェロー。

この間、水産生物学、特に沿岸性魚類の初期生態を研究し、それを基盤にして森から海まで

の多様なつながりとその再生を目的とする新たな統合学問「森里海連環学」を2003年に提唱。国民的社会運動「森は海の恋人」と連携し、日本の沿岸環境再生の試金石である有明海における森里海連環研究ならびに気仙沼舞根湾における3/11巨大地震と津波が沿岸生態系に及ぼした影響と回復過程に関する研究を進める。

NPO法人森は海の恋人理事、NPO法人ものづくり生命文明機構理事

主な著書：魚類学下（1998年、共著）、森里海連環学（2007年、共著）、森里海連環学への

道（2008年）、稚魚－生残と変態の生理生態学（2009年、編集）、水産の21世紀－海から拓く食料自給（2010年、編集）、森と海を結ぶ川（2012年、共著）など

**【メ　モ】**

**アンケートのお願い**

本日は、２０１４年公開シンポジウム「海遍路・東北－海から自然と文化を考える」にご参加いただきありがとうございました。

本会におきましては、本シンポジウムの内容を、本会会誌アカデミア№147　2014.8に掲載し、広く配布いたしたいと考えております。

また、本日のシンポジウムに参加された皆様方のご感想、ご意見等も合わせて掲載させていただきたく、つきましては、裏面にご自由にご記入いただければと存じます。

なお、会誌への掲載を望まれない方は、その旨記載願います。

おって、会誌をご希望の方は、お送り先をご記入いただければ、無料にてお送りいたします。

**ア　ン　ケ　ー　ト**

会誌の送付を、□希望する。　□希望しない。

　　お送り先　住所：〒

　　　　　　　宛名：

よろしければ、ご記入願います。

性　別：　□女性　　　　□男性

年　齢：　□２０歳代　　　□３０歳代　　　□４０歳代　　　□５０歳代　　　□６０歳代

　　　□７０歳以上

ご住所：　□京都市府内　　□近畿圏内（　　　　　　　）　　□その他（　　　　　　　　）

本シンポジウムの開催を何でお知りになりましたか

　□チラシ　　　□知人　　　□新聞　　　□HP　　　□その他（　　　　　　　　　　）

|  |
| --- |
| ○本日のシンポジウムの感想、意見、参加された動機等をご自由にお書き下さい。（□　感想等の本会会誌への掲載を望まれない方は、□内にチェックを入れてください。） |

※ご協力ありがとうございました。

**質　問　・　意　見**

**基調講演、話題提供へのご質問、ご意見等がございましたら、下記にご記入の上、総合討論の前までに、会場内に設置の「質問箱」へ投函願います。**

|  |
| --- |
|  |